

自由連合

Libera Federacio

N.º 40

1972

8月10日

低路市龜山354

自由連合社

電話：大阪1264

八月！

ふみ信

自連アジトに結集せよ

いつか一度たずねようと思って
来なかった人。
もう二度とこんな機会はないゾ

ものを喪すのにも、一応の手順
がある。

一きよにブルドーザーでバリバ
リとふみつぶしていく、という手
もあるが、まだまだ耐用年数がの
こっているの、自連、という建物
は、一見バラックのようで、あ
んがい堅固なしろものなのだ。

カワラをはぎ、カベをおとし、
転用できる柱をうまくはずす、
つまり破壊作業工程表がまずつく
られて、図面と進行表を手にした
現場監督が作業場をあるきまわり、
数十人の人夫がそれぞれの持場で、
えいおうと働く、ということに
なる。八月以降の約二ヶ月間、あ
るいはもっとの期間、自連発行所
Aアジトは、まさにそのような土
ばりの中の工事現場風景を展開
する。

全国的仕事師、自連アジトへ結
集せよ。

八月中の工事進行日程は三期に
わけられている。

第一期 八月 三日～ 九日
第二期 八月 三日～ 九日
第三期 八月 三日～ 九日

資料・アンテナ等整理
とシンポ

八月二七日～九月
八月二七日～九月

八月二七日～九月
八月二七日～九月

八月二七日～九月
八月二七日～九月

八月二七日～九月
八月二七日～九月

八月二七日～九月
八月二七日～九月

八月二七日～九月
八月二七日～九月

八月二七日～九月
八月二七日～九月

八月二七日～九月
八月二七日～九月

さにして約五〇センチの、一見ゴミ
クズの如き山である。

まずそれは、月別・種別・版別に
数十の束にわけられなければならない。

ついで、その目録作成である。紙
名・号数・発行年月日へびらなど推
定が必要だ。発行年・頁数・版。

そして、できれば主な内容の簡要欄
注記である。

これをどのように要領よく、きれ
いにかくか。へそのためには、ガリ
キリオーの字の練習を特別にやり
出している連中がそばにいる。

食事で、みんな仕事をやめてあつ
まる。ひるはみそしるしとめし、よる
はやきめし位のものだが、ともかく
腹一杯はくえる。そのあと十分、
ときには大延長して数時間、いま
ぼくらは何をしているのか、何故
するのか、このことを目的でない
としたら、このことを媒介として何
をめざすか、自連をつぶすことと
どのようにかかわるか、目録用に
つくられたカードは、何故このよう
な線が引かれているのか、自分と
組んだ相手との共同において、どの
ような関係を発展させるか、こ
こへ出てきた自分と、家の自分とを
どうつなぐか、これが討論される。

他者の話のきき方、自己の発言のし
方、会議の進行とまとめ方、総体と
しての自己の役割が省察され、今日
の結論は明日くつがえされる加さ自
己変革が、日々、眼前で展開するの
を、君はそこで必ずみる。

自連は、いまや、おのれをつぶす
ために、エネルギーのすべてを集中
して、走り出そうとしている。

いまだ、とびのけるのは。

かくして、いまバクダンをつめる
だけつめこみつつある自連は、爆撃
行へと、まさに地上滑走をはじめた
のだ。

Aアジト案内記

自連カイトイ！ 安部フナイ！

もうとつと大阪府警では御存知
のAアジト。だからかくすわけでは
ない。しかしわざわざ公開せんでも
エーやろ。でも、もし来るなら知ら
せて下さい。すぐ連連で道案内地図を
送ります。

大阪駅は「東出口」から降りた方
がいい。それから約30分。やがて、
いかにもありふれた場末の、ごたご
たした町並の一角で、きみはキョロ
キョロしている自分を見出すだろう。
ポストがある。××がある。せまい
通路まではみ出して、いろんな店が
ひしめいていて、(奥には有線)。

さて、その店と店との間の、品物
台のうしろに、ちょうど、物入れ、
といった形でベニヤ板の戸があつて、
よくみると、SC I 開面、というス
けた文字。

店の人には断らず、あやしげなそ
の戸を手前にひく。と、ぽっかりあ
いた暗い穴全体に、急な階段があら
われる。ぬいだらを手にもち、頭
と足許に気をつけて、洞穴へはいっ
ていくように、きみはおそろおそろ
そこをのぼるのである。

と、階段の途中から、とつぜんぱ
あつと明るくAアジトA号室の全景
が眼にはいつてくる。まさに天国の
ように輝いて。とたん、まだ首が
う上を差出したきみへ、うううと
誰かから声がかかるはずである。(誰
もいないときは黒板を見よ)。

部屋にいた連中は、一せいにきみ
を歓迎するが仕事の手はやめない。
部屋は雑然としているが美しい。
ひろい(と思うだろうが、押入れも
ふくめて四畳半なのだ)。これ以上
機能的には使えないとばかりに片付
けてあって、きみの荷物などは吊す
か壁にかけることになっている。天
井からぶらさがった、入場料10円、
のカンパ箱だけが、ことさら目立つ。
それで否応なしに、きみも10円を入
れるだろう。大きな黒板がある。き
みの名前をまずそこへ書く。よこに
作業の予定が書いてある。一客かき
客、カッテ、カッテ、カッテ、カッテ、
からうばく、きみは？と全員
の自己紹介がはじまる。(ハハハハハハ)

豊山漁村地域調査運動

▲労働通信・編集郎

何か一度は原稿を寄せたいと思
いながら、ついに「つづす」号ま
で何も出来ずに来ました。ことに
40号には何としてもと思いつつ、
多忙をきわめており、失礼してい
ます。

結局、私は自連編集部諸氏や多
くの読者の方々と意見の一致をを
見ぬままに今日に至ったと思いま
すが、つづける雑誌は数多くあつ
ても「つづす」雑誌の独自の問題
意識に象徴される自連の率直さと
根源的な姿勢には、つねに敬意を
いだいて来ました。今回もまた何
の原稿も送れぬままになりそうで
すが、私達の進めていく「豊山村
地域調査」運動への参加の呼びか
けをもって、原稿にかえさせてい
ただきたく存じます。新たな通信
が開始されることを期して。

「よびかけ」

各地の運動の混迷は、観念論の
自己増殖の海を成している。それ
は現実を見ようとせず、骨のずい
までしみこんだ長年のブルジョア
教育に基礎をおく「頭」で世界を
裁断しようとする。だが、ここか
らは運動の展望は何も開けてはこ
ない。現実の状況を正確に把握せ
ずしていかなる運動が組めようか。
現実の状況を知るには階級分析
を主軸にした調査活動を行う必要
がある。問題にぶつかつた時、そ
の問題の歴史と現状を調査もして
みず、あれこれと論じても何の
解決もえられない。

いま、豊山に起っている

＝S・S＝

A

Ⅰ。会社

工場移転→三交代勤務の導入→
小人数グループ制→
下級職制の増大→
幻の職場をつくることにより退
職者をまっ「プラス移転に伴う生活
圏の破壊による退社」→実質的な首
切り→

Ⅱ。組合

移転は基本的に認める(三月)
プラス三交代勤務も認める→移転手

嵯峨浩

資本と権力が綿密
な調査活動に基いて
戦略をたてていると
き、面白いかからや
る「ハ」のむいたときだけかわる
というのでは、左翼政治「口」と断じ
てよい。

我々は自らの無知と観念論を克服
し、日本の現実から出発した労働運
動・農民運動を追求するために、豊
山漁村地域調査活動を開始した。今
回は、最も矛盾の集約した地のひと
つ青森県での調査を行う。この活動
によって、現在の農業・農民のおか
れた位置を明確に理解し、我々の闘
いの展望をさぐりたいと思う。

広範な労働者・農民・市民・学生
の調査活動への参加を呼びかける。

日時 八月一二日(一) 二二日
場所 青森県下
費用 一万五千円程度
(東京基準の交通費
食費等)

食費等)

尚、我々の調査に関する位置づけ
と、調査内容についての詳細は「労
働通信」1013(一五〇四)を
参照して下さい。

連絡・問合せは左記へ。

「東京都大田区多摩川2-23-13
ひかり荘 労働者通信編集部
嵯峨 浩」

(TEL 03-750-2095)

共産党系軍派より
「日本打倒を志す、
すべての人々へ(全文)」
橋内 恒夫

回答論文・平岡正明「太田憲」等
「労働通信」6月号 面二〇〇頁刊別55頁
申込は「自由連合大阪まで」

地景

増加→交替勤務の過
休二日制

労働闘争中 ①組織内組織は認め
られず ②中央決定に反して支部独
自の闘争も認められず ③支部内に
おける青森部独自の活動も認められ
ず。 春闘に突入。各職場会議の旗

「赤青白黒とその職場職場で、××
会議とか××戦線とかかつてに書い
て」を建物に立てたり、スト破りに
対するピケ等。しかし、集約→終
了と同時に、六月上旬、工場移転。
叩。いま……

夏季一時金は必時間全面ストをか
まえる。当日にスト中止。回答がけ

月プラス一律五五〇〇で妥協。新設工
場のため機械がいまだに完成されて
いない職場もあり、最近まで草むし
り植木をうえたり、道路補修等の雑
用をやらされたりして消耗。ひとり
またひとり、会社をやめていきま
す。

駅から歩いて一時間。朝夕夜と送
迎バスで送られて畑の中の会社で働
かなくても、又「3」の若い人だから
いくらでも働く場所があるだろうし
「毎日毎日同じ生活なんかしたくな
い」と、ふと思う事だつてあるだろ
う。僕にはそれを止める言葉がない。
「組合なんか誰も信じなくなつたし、
時間のムダ。こんな畑の中の会社か
ら、いつときでも早く都会へ家へ帰
りたい」こう思うのもアタリマエの
こと。それに、少しばかりは冒険も
してみたい。「会社をやめて、住み
良い街に行つて暮そう。南の方へ行
つてみよう。若いんだから……」な
んて思つたりもするだろう。

闘う仲間はどうやらやめていく。
あとに残つたのは出世がしらすとゴマ
スリのオマンコ野郎たち。ギリギリ
の人数しかないため休みもとれな
くなる。

組合は経済闘争さえも途中でやめ
てしまう。「回答の前進。団結の勝
利」どっこいこっちはそうは思わな
い。回答には不満、組合なんか信じ
るもんか。ストライキは単なる回答
を引き出すための圧力じゃないんだ。
こんなことも知っちゃいないんだ。
ストライキは、俺達にとっちゃ合法
的に仕事をせずにいられる日なんだ。
解散のいつときというところ。中
には数名のバカがいて、ストの時に欠
勤届を出して会社にゴマをするげじ
たやつもいるけど……。

八月の定期大会の代議員選出に関
して僕らは何もやらなかった。何を
やたらいいかわからないし、やる
状況でもない。政治幻想なんか捨て
去ってしまったし、何も信じていな
いところから始めなければ……。そ
れが、いま僕の立っている地景だ。

B

今回の自連問題については、遠く
五五〇kmも離れている身の上、くわ
しいことはわかりませんが、僕はあ
まりにも傍観者のだったし、何がな
んだか……。言葉を信じられなくな
つたとか、無意味になったとか、つ
かれたとか、一方通行で終つたとか、
失敗したとか「次ページへつづく」

スコラのより

スタコラの的であれ

編集社員への手紙

う君、またK君。二度も来てもらってそのたびに留守ですまないことでした。四度目の予告はたしかに受けとりましたが、そのときもぼくはきみを待つていられない先約用件のため留守にしているはずです。

「自連」のことですか、ハナキにも書いたように、ぼくは向井氏の「つぶす」という問題提起をきちんと受けとめられていない状況下では、つぶすというより消えるというほうが形容として適切なと思っています。

ちやうどきのつづき、栗田氏からの来信に、その四日前の朝日新聞夕刊文化欄の「コラム」欄的「自連」廃刊問題を論じているとありました。まず栗田氏の手紙をきみに紹介しよう。

「前略、朝日のコラムはいつも佳い堂電エッセイになっている。「健」という人など人ななは知らないが、末尾の数字に意を添えると共に、ぼくは、この数字を逆手にとつて、ひらきなありたい気もしている。……栗田氏も右のように書いた「標的」の末尾数字というのを出してみます。次のとおりです。

「前略」もし、ミニコミな単なるマスコミや組織の特殊紙のミニコミ版でないとしたら、今日のミニコミに必然的な表現様式はなにかという問題をふまえないなきり、それは生まれては消えといういらだちの輪からぬけだすことはできない。……署名

これが「健」という文章の結びなのです。栗田氏は賛成を表した上で逆手にとつてひらきなありたいといいますが、ぼくは賛成の前にひらきなありたく思っています。

なぜかといえは「必然的な表現様式は何かな」という問題をふまえない限り」と書いています。この書きぶり発想をぼくは気に食わないのです。形式主義であり定式主義であると思います。また「生まれては消え」といういらだちの輪」と書いてあるのにも反対です。ここに

寺島珠雄

「自連」な持続性を帯びはじめたことに対しておこなわれたのだというのなぼくの理解です。もちろん「健」氏の論法の、表現様式の問題といふ方には持続的な短期的なふくんでいるので、一概に受け入れはよしとしているのではないとも主張できるものですか、そこらのアイマイ、あるいは論法の多岐性をもくめてぼくは賛成できません。

そして「自連」そのものになえれば、大体月一回の定期発行を考えられ、実行に移された時に、こんなにちの悩みは予測されていたとぼくは思っています。

なぜ定期発行されたのでしょうか、アナキスト連盟関係紙だった旧「自由連合」の継承としてでしょうかそれとも少しは兼ねながら主としてあらたな「自連」として発足するのに定期発行が必要だったからでしょうか。

「いまぼくは、読むことのできる「自連」発足前からの、こうした問いに答えてくれる文書を故意に読まずに置いています。書くのもシンドイカ、また原紙に刻むきみたちもシンドイカのだから早く終わります」

要するにカッコ悪くやめたらいいのです。前払い制代はいづれ返却しますとか、あるいは黙っていて督促されたらそんな弁解だけするとか、またはカッコ悪くつづけたらいいのです。金をもらって人への義務で新規にはもたないでくださいだん部類をへらしなから、いつも義務的イヤー発行を明記して前納制代の最後の一人宛にもいま同様のやーじ数でかり版印刷にかけて。

ぼくは、いわゆる「理念」的なことについてなにも書きませんでしたが昔なかつたのは、すでに「つぶす」ための方法論や些少なならし日程化している現状は、つまり発行の理念はもたなくなつたからだと見ることが原因しています。

「自連」を創造的につぶすといえちやよつと耳でわりはいいか、要はサトウエイサク流儀の「前向き」論と五十歩百歩。つぶすこととはつぶすことであつて、それにすらあれこれ

は持続していればいらだちはないなのごとき錯誤があります。「自連」をつぶすという問題提起はこれとまったく逆に、「自連」な持続性を帯びはじめたことに対しておこなわれたのだというのなぼくの理解です。

結論、まあ一回消えなさい。出なくなつたらまた出なさい。へぼくはホントはいま消えてはならないと思つてます。きみたちは消えるための準備をしているならそれを尊重します。……そして、また出てきた消えてきたまた出てきた、心なくもぼくは「気ノキイタオ化ケナラ……」と決まっています。とにかく今回はスタコラサッサとけりをつけることです。

短・信

40号に原稿を書きたいのです。いま、書きつづけている未完成のものを夏中に仕上げねばなりませんので、この度は見送らせて下さいませんか。なんとしてでも「自連」をおつづけくださることを願います。しばらく休刊されてでも、40号までの分、未納の分、御請求くださいませ。若しあまつてあればカンパにまわして下さい。

(福岡・河野信子)

何を書き進めたいと思いつつも、劣等、老齢、眼病のため、できさせました。「自連」の廃刊はごんねんです。なんと新しい企画戦術で新出発できませんか。

(群馬・大島英三郎)

「こしはら」東京で暮らして週末は山形で寝るという優雅な暮らしをしています。それで手紙を書く暇のな置けました。五日ごろまでに、原稿をお送りします。

「ニューウアー」は、出したいと出ます。つぶしたかったら見栄もへたくれもなく「疲れた」という理由でつぶす。今は、体の調子もいし頭を狂うほど考えているのでつぶす気はない。今までのニューウアーは偏くつぶしたなあ、ということになります。

自連はつと出て欲しいし、いなく思いますが、疲れてきたんやつたらしばらく休んだらと思いきや変身な大事だと思えます。

ともするとぼくらの間に生まれる疑心暗鬼にいちばんいいマッサージはなんだろうなと手をなえ品をなえやっております。

(山形・菅原 秀)

不自由なガソリン化への危惧

へつづすこと
へつづれること

北邦彦

体験をモチーフとして

ちやうど昨年の今頃だったと思う。自連のアンケに、「共同体というとなんかは何を連想しますか」といった質問の項があったことを記憶している。ぼくはそれに、「雨後のタケノコのように共同体は新たに生まれ、そしてつぶれていくだろうけれど、今はそのつぶれ方に興味をもっている」といったようなことを書いた。でも、それははっきりとした状況認識のもとに書いたものではなく、どちらかというところ、それまでぼくがめり込んでいた共同体へらしきものの、ぼくの予想をはるかにこえる事態の急変の中で音をたててこわれていったのだ。その余韻のもたらすある種の予感であったといえる。そして事実この一年間、いろんなクルーズの離合集散を目のあたりにしてきた。今また、自連の最後の号につきあつことになった。先のぼくの感じ方はそれ程的はずれではなかった、と思う。でも一方、その感じみだいなところからめけ出せないなら、そういつに状況にくみ入る何らの手段を見つけ出せないまま、傍観するしかないだろうというところは、ぼくにとっては切実である。その意味で、この一年、ぼくはぼくなり、いつにたいていソナールな体験にこだわってきた。ただその場合も、体験だけをとり出して考察するということではなく、現実生活している場面に体験をよみかえさせ、そのふくらみを大切にしてきた。そして今、そのうちのいくつかについては、他の共同体にも共通する課題として一般化して指し示すことができるように思う。

は、体験によって何かを語れても、生活意識にまで到達し、そこから生活思想を引き出しえていないのは、その稀薄さのあらわれである。たとえ、ともすれば、当時の組織や運動というものの欠陥をあげつらうことばかりに傾注してしまひがちだが、本当に重要なのは、あの生活のもつていた全て、すなわち、楽しいこともあり、充実感を感じていたこと、ある、というようなことを含めて、でありながら、あれを延長してければ仲間を殺しかねない、又自分が殺されかねないというところなのである。今ぼくが意識化しているのは表層にしろすきず、意識の組上りのぼつていないところを振り返りていかないと、ぼくの総括は終わらないとさえいえる。それは同時に、ぼくが現在の生活の日常性にどこまで肉迫できているか、という困難な課題でもある。穴はすつとつふいていく。見田宗介が、「現代日本の精神構造」の中で戦争体験の継承について触れながら、可へ戦争体験に固執すること自体はむしろ、好ましく、雄々しいことである。問題は、その固執の仕方にあるのだ。……体験について語るのではなく、体験によって語ることを、体験をテーマとしてではなく、体験をモチーフとして活かすことである」と述べている。我が意を得たり。これから雄々しくこたわっていくつもりである。

裏を返せば

私達は自連をつぶす——自連から送られてきたビラを見て、複雑な気持ちになった。それをうまく整理できないが、ひとつには、実践をやっている組織内部からそういった声を出すのは本当にむづかしいだろうな、ということである。外から、あの組織を、あの運動をぶつぶせというのとはわけが違い、組織の中からという時、流れに足をとられぬという両足でふんばりながら、自己と組織とを強固な思想をもって対象化していける自由な個人の存在がどうしても必要だ。そういつた存在を欠いた時、それは容易に官僚主義へ転ずる。今の時局で、発行というものを、主

体の奥深くをさしつらぬきながら、透徹した客観的認識として打ち出した自連の復は、過少評価されてはならないと思う。

ところが先に複雑な気持ちでいつたのは、ちやうどこのところの裏側にある問題なのである。つまり、自連のもっている裏、というが特長は、裏返せば最大の欠点でもあるような気がする。

課題への固執

へどの時局は、その組織論の問題でもあるが、たとえぼくが、頼る者は自分以外には誰も居ないということに気づいた時、その心境は、まるで海原の真中に唯一人であるようなものだった。ぼくは冗談ではなく、ぼくに脚はあるが、そして脚はしゃかり地を踏みしめていくが、時々下を見てものだった。そういつたことがあってはじめて、ぼくは背負っている荷の大きさと重さを、しかとつかむ事ができたし、それに押しつぶされそうになりながらも、ひとり歩きする事ができるようになった。もし、その時局は、と向う人間がぼくの前にいれば、ぼくはもつと気が楽だったかもしれない。でも、その向かいのけを、ぼくはたぶん、踏みしめていく地上がふいにどこかへ飛んでいくのではないかと、肉体的な不安感とともに受けるのではなく、頭の方で受けとっただろうと思う。ぼくには、頼れるのは結局自分一人だ、という意味の深刻さは、容易には他人に伝達できないものかように思われる。そして、その深さと切実さを知った者同志でないと結びつく事はできない、というのはいささかのだらうか。

今度の自連の発行のもつ意味の深さと重さを、何人の者が共有しえていくか、ぼくには判らない。ただ、へつづすことという一見主体的に聞こえる名辞の裏に、安速に自らをすり込ませ、単なるスローガンに流し、へつづれることへの認識をすり落してしまふことを危惧する。その時、へつづすことという言葉とは裏腹に、自連はつぶれてしまふ。

今年の一月に、孤散から凝縮へという自連の方針が打ち出されたが、今、そのままだことが個人に向われている。安易に総括を出してしまうのではなく、自己の課題を執拗に掘りつづけることが、大切なのだと思う。

(北 邦彦)